

Title	[短信] 「琉球史料叢書」の出版記事紹介
Author(s)	小野, まさ子
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(3): 59-60
Issue Date	1991-12-25
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/20373
Rights	浦添市立図書館

「琉球史料叢書」の出版記事紹介

1991年6月27日の琉球新報・沖縄タイムスの紙面に、「戦前の新聞見つかる」という見出しで、県議会史編纂室が東京の國學院大学図書館に保存されていた戦前の琉球新報・沖縄日報を見つけたというものであった。これらの新聞は、沖縄を何度も訪ねている折口信夫氏所有の資料で、1938年1月から5月迄と、1940年の1年分というまとまったものであった。これらの新聞は、現在迄未確認の部分が多かっただけに、たいへん期待をもたれ、早速1992年の2月22日には琉・沖両紙ともに、沖縄県立図書館に國學院大学からマイクロフィルム化されて寄贈された経過を知らせる記事が掲載されている。そこで、現在全集刊行作業中の真境名安興の執筆した記事がないだろうかということで、フィルムを見せてもらい、幸いにも「沖縄現代史」がいくつか見つかったのだが、この経過については『真境名安興全集』刊行事務局のニュースの中で紹介されるであろう。

ところで、この作業中に伊波普猷関係の記事で面白いものを見つけたので紹介することにしよう。写真にもあるように、昭和15年（1940）4月27日の沖縄日報の記事がそれである。見出しには「初の琉球史料叢書『琉球国由来記』伊波氏の解説で出版」とある。そして伊波普猷の写真が掲載されている。この史料集は、沖縄では歴史学のみでなく、民俗・文学ともに重宝して使用させてもらっている『琉球史料叢書』全5巻のことである。しかしながら、記事中には「東京にて高安記・発・伊波普猷氏の数年の日子を費やした精進が身を結んでこの程『琉球国由来記』が出版のはこびに到った。同書は東京名取書店から出版される『琉球史料叢書』の第1巻として編まれたものだが、この『琉球史料叢書』は全部で約20巻に及び慶応大学教授横山重氏・東恩納寛惇に伊波普猷氏を加へた三権威が解説執筆に当たるもので」というように、当初は20巻もの大史料集として刊行される予定となっていたとある。

『琉球史料叢書』の中で伊波普猷の担当したのは、第1巻の「琉球国由来記」と「琉球国旧記」の解説

であるが、後者については9月25日脱稿となっている（「叢書」第3巻参照）ので、この記事の時にはまだ書き上げられていなかったのであろう。一方前者の解説を伊波普猷が伊豆吉奈温泉で書いたのは、その解説末尾に月日と共に記されているので判っていたが、それが2週間というわりと長期の時間、しかも全く専念する形でかかれたという事実が判って面白い記事である。また取材は単独で伊波普猷におこなったものらしく、中野区塔の山の自宅にて取材した旨の事が記されている。ところで彼が伊豆で2週間かけて書いた解説は、現在由来記の本文と共に読む事が出来る（「叢書」第2巻参照）。

ところで、繰り返すようだが、名取書店発行のもの、それから東京美術社の本及びいくつかの複製本でも判るように、『琉球史料叢書』は5巻である。横山重氏の「後記」（「叢書」第5巻参照）の中にも、20巻の計画の事は記されていない。むしろ当初から5巻として準備したかのような記述に占められている。しかし、収集史料の中に「球陽」や「碑文記」等があること、刊本にはならなかったものの原稿作成した「球陽」があり、そのうつしを戦後球陽研究グループへ提供した事などが記されていることや、さらに東恩納寛惇の解題も新聞に「第二巻は『中山世譜』で東恩納寛惇氏が当たる事になっている」という説明と比べて、彼の解題が「球陽」等も含めた幅広いものになっている。横山氏の「後記」には昭和11年（1936）から5巻として準備されている様に記されてはいるけれど、計画の段階では20巻という計画もあったのであろうかという事を推測させる。5巻の刊行の時も既に日支事変（日中戦争）の膠着状態にあり、印刷用紙も制限されていた時代である。新聞社がそうであったように、出版書店も統合され、名取書店も岩波書店へと吸収されている。以後統制の中で戦争へ、そして昭和20年（1945）の敗戦をむかえる。このような時代ためになくなった計画であったのであれば、いかにも残念といわざる得ない。

〈小野まさ子〉

初の琉球史料叢書 『琉球國由來記』

伊波氏の解説で出版



東京にて歴史記『琉球國由來記』の著者伊波氏の数字をこの日を書いた。伊波氏が著した『琉球國由來記』が出版のはこびにまつた。同氏は東京各取書店から出版される『琉球史料叢書』の第一巻

として扱われたものだがこの『琉球史料叢書』は全部で約二十巻に及び厚歴大少教授中山重比呂殿が著した。伊波氏に著した加へた三冊が『琉球史料叢書』の第一巻たる『琉球國

由來記』の解説には伊波氏、第二巻は『中山世譜』で伊波氏著者が著ることになつてゐる。伊波氏は『琉球神道記』の著者として断界の學究である。伊波氏は『琉球國由來記』の解説を執筆するため伊豆青森温泉にもむいて二週間びたすら編輯製作に没頭、この程著く説いて國に於て伊波氏は中野區塔の山の自宅で著る。『琉球國由來記』の出版はまことに歴史的なものであり、その第一巻『琉球國由來記』の著者は初の出版であるので琉球研究に大きな貢献をするものと考へられる、この解説に當つては「日

本文化の源流」と「神道考」の諸論文を掲載し更に傾形な歴史で國んだのであるが、いやしくも琉球史を研究するものにとつて坐石の書といふべく本書を讀くことなくして神道を誤る勿れといつても過言でないと思ふ。大分清浄な書物なので他が當分の十五位になるかもしれない琉球國由來記は清の康熙五十二年（我が正徳三年）琉球國王尚敏の命によつて編纂され、琉球の「延喜式」ともいふべきものである、刊行に當つては尚敏の「所説」を本を台とし、所説の元元百餘條の琉球史料のものに校合する等の一方ならぬ努力が辨はれ、冊数すべて一冊前後に分れる。篇は卷一「王城之公事」、卷二「官制列品」、卷三「始略」卷四「始略」卷五「城中御獄併百里中御獄年中御記」卷六「國廟」卷七「泊村由來記」卷八「那覇由來記」卷九「唐史記全集」卷十「諸寺神記」卷十一「諸門諸寺地起」口下十八條に及んでゐる。

「沖繩日報」昭和15年（1940）4月27日より